【コラム】

地域とともにある人文学：信州大学人文学部2015年度の取り組み

金井　直

信州大学人文学部は、その広範な研究教育領域（18分野）を活かし、従来から多様な地域貢献・連携活動を展開している。人文学部地域連携オフィス所管事業としては、青木村、安曇野市との連携協定があり、前者とは主として教育現場において（青木中学校における「教科指導法特論Ⅱ」の実施）、後者とは委受託研究の実施というかたちで、協働を継続発展させている。また、人文学部広報委員会主管事業として、市民公開講座「夕べのセミナー」があり、1992年の開始以来、開催70回を数える。一方、より広く学生に開かれた教育プログラムとして2014年に「フィールド実践演習」が新設され、松本市の観光ボランティア活動や、信州にまつわる映像制作など、地域の特質や課題に即した学びの機会を創出している。

人文学部の今年度の新たな取り組みとして特筆されるのは、「信州をフィールドとした新たなワイン学の構築」プロジェクトである。県内の識者・専門家を招聘し、国内外のワイン事情や文化・歴史を学生たちと学ぶとともに、ワイン産地形成の課題や観光の振興策など、ワインを通しての地域活性化の可能性が探られた。

もうひとつの新規取り組みが、セイジ・オザワ松本フェスティバル実行委員会との連携事業である。「音楽の“楽しみ方”と“たしなみ方”」と題し、同フェスティバルの魅力や意義さらには可能性を、広く市民・学生と分かち合うための３つのプログラムを、人文学部教員主導で開発・実践した。筆者もその運営メンバーのひとりであったので、ここでやや詳しく振り返りたい。

第１回「オペラの前に“から騒ぎ”」（７月７日、まつもと市民芸術館）は、フェスティバルのメインプログラムであるオペラ公演「ベアトリスとベネディクト」の“予習”企画としてデザイン・実施されたものである。成沢和子名誉教授（英文学）、吉田正明教授（フランス文学）飯岡詩朗准教授（映画史）をパネリストに、濱崎友絵准教授（音楽学）の司会で進むトークは、楽曲分析のみならず、作曲家ベルリオーズについて、また、当時のフランス文化について、さらにはシェイクスピア原作との異同など、人文学の多様な観点から複数の見どころを紹介する充実した

オペラの前に“から騒ぎ”フライヤー

プログラムとなり、音楽ファンのみならず、文化教養への関心の高い市民層からも大いに好評を得た。

８月９日、この日は第１回セイジ・オザワ松本フェスティバルのオープニングであったが、これに連動しつつ、「レクチャー・コンサート―教えて！音楽の“レシピ”」（まつもと市民芸術館）を開催した。７月のイベントからは一転、この回は音楽そのものが主役。小澤征爾の薫陶を受けた演奏家、会田莉凡（ヴァイオリン）、谷口拓史（コントラバス）、千原正裕（ヴィオラ）、黒川実咲（チェ

表１　信州大学人文学部教員の地域にかかわる活動例

名称等	内容等	関係機関団体等
松本市芸術文化振興財団評議員	文化施設の運営について討議	松本市文化振興課
茅野市美術品寄付等検討委員会委員	美術作品の評価	茅野市教育委員会
長野県信濃美術館整備検討委員会副委員長	県美術館の将来像の検討	長野県文化政策課
長野県信濃美術館整備検討委員会作業部会長	美術館整備計画の策定	長野県文化政策課
松本市美術館デザインコンペ審査委員	デザイン審査	松本市美術館
あいちトリエンナーレ2016キュレーター	地域特性を活かした国際芸術祭の企画運営	愛知県国際芸術祭事務局
安曇野芸術実践	連携協定に基づく受託研究	安曇野市地域づくり課
地域エネルギーを考える連続ワークショップ講師	一般市民、松本市、金融機関関係者向け学習会	松本市環境政策課・政策課
志賀高原ユネスコエコパークワークショップ・ファシリテーター	住民向けワークショップのファシリテーター	山ノ内町観光商工課・教育委員会
住民参加型「WEB－GIS地域安全マップ」の作成	住民参加型地域安全マップのWeb運用システムの開発	兵庫県西宮市
行政と住民の協働を進めるための社会的資源に関する研究	連携協定に基づく受託研究	安曇野市地域づくり課
安曇野観光における情報資源に関する実態調査	連携協定に基づく受託研究	安曇野市地域づくり課
行政と住民の協働を進めるための要因に関する研究	連携協定に基づく受託研究	安曇野市地域づくり課・観光課
平成25年度安曇野市職員研修講師	協働事業に関する職員向け研修会	安曇野市地域づくり課
松本市観光ボランティア体験実習	松本市における観光ボランティアガイドの体験学習	松本市観光コンベンションセンター
松本広域圏におけるワインと観光	松本広域圏内の地域観光資源についての調査一研究	松本広域連合
NHK文化センター松本講師	フランス語とフランス文化（シャンソン等）講座	NHK文化センター松本
長野日仏協会副会長	長野県における日仏文化交流の推進	長野日仏協会
松本美須々ヶ丘高等学校評議員	長野県高等学校評議員	松本美須々ヶ丘高等学校
公益財団法人八十二文化財団理事	長野県の芸術・文化にかかわる財団運営について討議	公益財団法人八十二文化財団
松本市教育委員会委員	松本市の教育と文化について審議	松本市教育委員会
NHK文化センター松本講師	一般市民対象の『論語』連続講座	NHK文化センター松本
長野県日中友好協会講師	一般市民対象。日中文化交流等に関する単発の講座	長野県日中友好協会
文献調査	御嶽神社所蔵の古典籍の調査	御嶽神社

地域連携オフィス調べ（2015.8.1）

ロ)、小林万里子（ピアノ）の各氏が、信州大学交響楽団を指導するというプログラムであった。眼前で練習が繰り返されるごとに音楽の響きが高まるステージに、聴衆も大いに引き込まれたが、それにもまして、参加した学生たちの喜びは大きかったはずである。楽都松本で音楽とともに生きる幸運を、強く感じてくれたことと思う。

そして「音楽の“楽しみ方”と“たしなみ方”」今年度最終企画として開かれたのが「楽都・松本の育み方」(11月15日、キッセイ文化ホール）である。さまざまな立場のパネリスト（坪田明男［松本市副市長］、武井勇二［OMF総合コーディネーター］、西森尚己［OMF市民ボランティア］、山根宏文［松本大学総合経営学部教授］）を迎え、第１回サイトウ・キネン・フェスティバル松本の誕生の経緯を振り返りつつ、そこに第１回セイジ・オザワ松本フェスティバルの成果と今後を重ねみるシンポジウムは、松本の音楽文化の蓄積を明らかにすると同時に、未来に向けて、さらに音楽とともに歩み続ける街の姿勢を市民・行政そして大学として確かめ合う、貴重な機会となった。

以上のような３つのプログラムを通して、人文知の楽しさ、演奏がもたらす感動、芸術文化都市の価値が、多くの市民に伝えられた。この成果は、フェスティバル実行委員会からも高く評価されており、共同企画の来年度の継続開催も概ね確認されている。今後、ますます信州大学人文学部と松本市・松本市民の協働の機会として、「音楽の“楽しみ方”と“たしなみ方”」の意義も高まっていくことだろう。

もちろん地域と人文学のつながりは、上述のような学部主導の事業によってのみ支えられるものではない。教員個々の研究領域の専門性や訴求力にもとづく日々の活動ひとつひとつこそ、関係の根本である。表１をご覧いただきたい。近年、人文学教員が関わる活動のごく一部を紹介するものであるが、芸術文化から教育分野、社会学的な調査分析まで、きわめて多様・多元的である。

要するに、人文学部の研究教育は、市民の日常や心に近いところで日々おこなわれているのである。学部の個性を活かしながら、またこの信州の地の特性に応じながら、文化というインフラの維持・発展という重要なミッションを、学部として今後も力強く担っていきたい。

（かない・ただし／信州大学人文学部地域連携オフィス幹事）